

氏名・(本籍地) 勝 崎 裕 彦 (東京都)
学 位 の 種 類 博士 (仏教学)
学 位 記 の 番 号 乙第 85 号
学 位 授 与 の 日 付 平成 23 年 3 月 15 日
学 位 論 文 題 目 小品系般若経の研究
論 文 審 査 委 員 主 査 小 峰 彌 彦
副 査 小 澤 憲 珠
副 査 渡 辺 章 悟

勝 崎 裕 彦 氏 学位請求論文審査報告書

「小品系般若経の研究」

論文の内容の要旨

本論文は大乗仏教運動の興起時代を担う初期般若経の経文解釈を通して、大乗仏教の教理を解明し、大乗仏教の基本的な枠組みを解析したものである。その際、小品系般若経から大品系般若経へと拡大展開する大部般若経典を全体的に俯瞰しながら、特に原初的な小品系統の教説を中心に考察したものである。

小品系般若経は、サンスクリット本、漢訳本、チベット訳本など文献資料が豊富である。特に、漢訳テキストは古訳・旧訳・新訳の三訳が数種揃い、その上小品系統だけではなく、大品系統との章品の対照も可能であり、多種経文の比較研究にも適している。こうした小品系般若経諸本の文献的資料価値は言うに及ばず、思想的重要性を強く意識しながら、初期大乗仏教経典の枢要に位置付けて、その全体的な解釈研究を試みた成果が本論文であると言える。

さて、小品系般若経の教説内容の解釈研究を目指す本論文は、各種テキストを比較検証しながら全体的な教説構造を分析し、思想的解釈を順次論述していく構想によって展開している。その際、大著『原始般若経の研究』(山喜房仏書林、昭和 19 年刊、増補改題版『大乗仏教の成立史研究』昭和 55 年刊) で知られる、般若経研究の泰斗梶芳光博士の研究成果に依拠しながら研究を進めたのが本論文である。その成果の中で「別出般若経対同表」と「別出般若経科判」が本研究の基礎となったものであるが、とりわけ博士制作の科判こそ、小品系般若経の全体の構成や各章の教説構造を理解するために、まさに本論文の基準研究であったことが首肯されるのである。

本論文では、小品系般若経の全体の教説が、第一章品〈須菩提品〉を出発の章品として、第二章品〈天王品〉・第三章品〈善男子善女人品〉・第四章品〈新発意菩薩品〉・第五章品〈久発意菩薩品〉・第六章品〈不退転菩薩品〉・第七章品〈総摂品〉へと継承展開し、第八章品〈随順品〉を経て、最終の菩薩行道篇の章品と考えられる第九章品〈常啼菩薩品〉によって完結していることを詳細に論証付けたのである。もとよりこの全体構成は、梶芳博士が大品系統の西晋無叉羅訳『放光般若経』を基軸として、小品系統の後漢支婁迦讖訳『道行般若経』を含めて制作された「般若経科判」に依拠して導き出された研究結果である。

以上の結果として、小品系般若経の全体章品の教説構造の解析を含めた「小品系般若経各章品章段区分名一覧表」が完成するわけであるが、本論文に提示した図表は本研究の論証展開の座標軸となったものである。すなわち、各種テキストの章品の分量及びその対照関係による区切りにはいささか異同があることから、〔A〕段、〔B〕段等の章段区分を施し、加えて本論文においては各章段ごとの品名の呼称法を仮に定めて研究を進めている。ここに極めて便宜的ではあるが、小品系般若経の各章の品・区分内容に即した品名、つまり章段区分名が確定して、各章品区分並びに全体の教説構造を俯瞰して理解するための利便がはかられたことになり、本論文の独自性を明確にしている。

こうした次第で、たとえば第一章品〈須菩提品〉についていえば、小品系般若経の各種テキストの中で、漢訳最古訳つまり 2 世紀後半の後漢光和 2 年 (179) 訳出の支婁迦讖訳『道行般若経』では、その冒頭第一

章の道行品第一において、大乘（摩訶衍）の宣言がなされ、菩薩・摩訶薩義を標榜して、般若波羅蜜の教義が開示されている。

大乘仏教の興起時の新しい理念やその信仰運動の本質を見きわめるためには、小品系般若経の教説構造を分析し、経文内容を解析することが必要であることは言をまたない。そこで小品系般若経の読解によって大乘仏教思想の出発点を把握し、菩薩思想の基本的教理を認識して、大乘経典制作過程の具体的なありようを解明しようと試みたものが本論文である。

次に本研究の一つの特徴として挙げられるのは、「対告衆の位相」を把握することによって、教説内容の整理や思想内容の解析を模索したことである。すなわち小品系般若経の解釈に際して、須菩提（Subhūti）を中心とした対告衆の性格と役割を解明することによって経文理解の手掛かりを見出そうとしたことが、本論文の特色を生みだしている。例えば、第一章品〈須菩提品〉は、須菩提による般若大乘の成道・転法輪の章、第二章の〈天王品〉は、帝釈天勸請の章ととらえること等にその特色が見られる。

このような研究視座に立って、上掲の目次の如く本篇「小品系般若経解釈の基本的研究」において、小品系般若経の本体の教説である全九章品の解釈研究として展開したのが、本論文である。そして、一つの結論的論究として、「小品系般若経の教説構造と主要理念」と題した結語を書き記して本論文の帰結としている。

なお附篇「小品系般若経解釈の諸問題」は、本体の論考である本篇の諸論証を補うために提出した小品系般若経研究の各論、ということになる。

審査結果の要旨

本論文は、般若経研究の先駆者であった梶芳光運博士の研究と指導のもとに成ったものである。それは論文審査申請書の中で、研究者自身が「生前の梶芳博士の具体的指導に導かれながら、基準とすべき梶芳博士の研究成果に依拠しながら、小品系般若経の教説内容を詳細に検討して、その全体的かつ総合的な解釈を提出しようとするものである」と記しているごとくである。

いずれにしても本論文は、大乘経典の中核ともいえる般若経の形成過程を踏まえてより原初的な内容を持つ小品系般若経の教理・思想を克明に解釈しようとしたものである。特に、多様なテキストや豊富な分量の経文を解析するために、「小品系般若経の登場者とその説法の問答構図」などの図表を作成して、複雑な論証の手引きとしたことは、論証上まことに巧みであった。

本論文の研究手法の大きな特色であったと言ってよい。

また本論文のもう一つの特徴は、対告衆の位相に従って教説を解析しようとした点である。すなわち本論文の解釈では、第一章品〈須菩提品〉はその名のごとく仏が対告衆の主役として須菩提（Subhūti）を指名し、仏の威神力（buddha-anubhāva）を与えて、般若波羅蜜を説くことを要請する。声聞弟子の筆頭の上首ともいべき舎利弗（Śāriputra）は相手方の脇役として設定され、ここに須菩提との対話を通して、菩薩の修習すべき般若波羅蜜の教説の応答経文が展開する。途中に登場する説法第一・弁才第一といわれた富楼那（Pūrṇa-Maitrāyaṇīputra）も、須菩提の所説を支持する添え役といった役割である。つまりは、初期仏教教団以来、釈尊を支えてきた智慧第一の舎利弗、説法第一の富楼那、あるいは無諍行第一ないしは解空第一と称された須菩提などの高名な仏弟子たちが登場して、経文の内容をして仏の教説たることを目指しているのである。仏陀釈尊の往時の説法場面を想定して出発時の教説が説き出されたことは、ここに改めて強調するまでもない。ただその際、小品系般若経では、それぞれの仏弟子の役割の構図が変化しているのが見逃すことのできない特徴である。このような立場に立って、仏を中心とする登場者との対話形式による説法の構図を、第一章品から第九章品までの各章ごとに整理して、検証したところの大きな意義がある。このことによって、小品系般若経の問答構図もまた一望に俯瞰できることになったと言えるからである。

さらに本論文は、サンスクリット文『八千頌般若経』への一定の視点をもって、古訳・旧訳・新訳の揃う漢訳諸テキストの評価やその取り扱い方に特別な注意を払った視点が評価できる。特に、小品系統・大品系統を通じてというよりは、般若経諸文献の中でも最古の漢訳である後漢支婁迦讖訳『道行般若経』を第一の基本テキストとして挙げ、これに準拠して逐一忠実なる義訳作業を全うして改訳されたとされる呉支謙訳『大明度経』を併せて、古訳の二経として重視して、音写語や義訳語、古訳・旧約新訳の特徴など漢訳問題についても多くの論究を試みている。というのも、小品系般若経の豊富な各種漢訳諸本がそうした研究考察に多くの示唆を与えるからで、近時、訳語研究とりわけ古訳語研究分野で、研究者の論考が引用・参照されることも多い。

本論文について総じていうならば、初期大乘仏教時代における枢要な経典である小品系般若経の教説の位相を具体的に明らかにしたことになる。「小品系般

若経の研究」としてまとめた成果は、ともかく一定の評価を与えてよいものであろう。ただここに、本論文に対していくつか苦言を呈するところがないでもない。一つには論文の重複のこと。本篇に対して附篇は、本論における研究考察の例論となる各論篇であることは承知しているが、論証過程における必要上とはいえ、少し重複が目につくこと。二つには註書きのこと。旧稿の註に対する確認の意味もあると述べているが、いさかまぎらわしい感は禁じえない。

さらには、本経の構造を再構成しながら堅実に論ずる点は高く評価出来るものの、本経をはじめとする初期大乘の担い手について、平川彰の学説を踏襲しながら近年の批判的研究を取り入れていないことはやや残念である。また、近年アフガニスタンより回収されたスコイエン・コレクションのうち、ザンダー (L. Sander) によって研究された『八千頌般若』の古写本について、全く言及されていないことは、本経の構成を考察する際に重要な資料となるだけにとりわけ惜しむべきであった。

しかし、このような瑕瑾は、もとより本論文の成果を決して損なうものではないし現時点でこれまでの研究をこのような形で纏めたことにこそ大いに価値がある。

研究者の今後の研究の中で各論篇を継続し発表され、本論文のさらなる充実を期待しつつ、本論文が学位請求論文としてふさわしいものと判定する。